長良小学校の先生方に学んだこと

B3E12003　岩井洋太

見学の感想

長良小学校の授業を見学する前に、教務主任の先生から「長良小の子どもたちはたくましく粘り強い」という説明を受けました。実際に授業を見学してみて、その言葉の意味が分かりました。3年1組の社会の授業ではほとんどの児童が挙手をし、自分の意見を述べていました。なかなか自分の意見がみんなから理解されなかった児童もあきらめずに何度も挙手をして、粘り強く自分の意見を発表していました。次に見学をした6年1組の社会の授業でも、ほとんどの児童が挙手をしていました。

私たちが長良小学校を訪れたのは5月でしたが、新しい年度の始まったばかりである5月に、自分の意見が言いやすい雰囲気の学級が作られているということは、学校全体が一丸となって取り組んでいるためだと思いました。また、体育の授業中でも、廊下ですれ違ったときでも、必ず長良小の子供たちは挨拶をしていました。見知らぬ人に対して自発的に大きな声で挨拶ができるということに驚きました。私が教員になった時には、長良小の子どもたちのようなたくましく粘り強い子に育てていきたいと思いました。また、私自身が長良小の子どもたちのような主体性を持ちたいと思います。

見学をさせていただきありがとうございました。

「みどり会」を読んだ感想

「みどり会」を読んで、長良小が今までどのような教育を目指してきたのか、長良小に勤めていた先生方がどのような努力をなさっていたのかを知ることができました。私がその中で特に印象に残ったのは坂本憲一先生の「『たくましさ』鍛えられる教師という視点から」という文章です。ここから私は、子どもたちに「たくましさ」を培うには、教師もたくましくなくてはならないと思いました。

長良小の先生方の共通理念として「子どもの側に立つ教育」があることがわかりました。また、その理念を具言化していくためには、一人一人の教師が自らの力量を高めていくことであり、長良小学校は教師の「修業の場」だということが書かれていました。この文章から私は、教師として教育に携わっていくためには、まず自らの人間性を鍛えなければならないと思いました。

子どもたちは教師をよい見本にすると思います。そのときに、教師の人間性がどうなのかということが、教育において大事になっていくと思いました。この「みどり会」から私がどのような教師を目指すのか、そのためにはどのような努力をするべきなのか、ということがわかりました。自分の目指す教師像、人間像に向かって頑張っていきたいと思います。

長良小学校で学んだこと

B3E12006　　大澤　穂

今回、岐阜へゼミ旅行という形で行き、岐阜市立長良小学校を訪問させていただいた。長良小学校では、学ぶことがたくさんあり、見習いたいと思うことばかりであった。

まず、３～６年生の授業を見させていただいたが、授業中の児童の答え方がどの学年も結論先行型で自分の意見を言っていたことに驚いた。大学生の私でさえ、答え方がまずく相手になかなか伝わらないということがしばしばあるのに、小学生のうちからこのような答え方ができるというのは、先生方の指導がしっかりしているからだと感じた。小学生のうちからそれをしっかりと身につけておけば、これから先も、役に立つことは間違いないだろう。

次に、教室一面が授業で使うことができる資料であふれていたことに驚かされた。特に３年生の社会科の授業を見させていただいたときに、黒板の上のスペースだけでなく、右や左の壁にも航空写真や探検で行った場所への道のり、ある場所で調べた交通量などが見やすく、分かりやすく貼られており、児童はそれをうまく利用しながら発言していた。教室にただ貼ってあるというだけでも、児童は無意識のうちにその資料を見ていると思うので、確実に自分の住んでいる地域の知識が増えているだろう。それに加えて、ただ貼っているというだけでなく、教師が授業中に壁に貼られている資料も使っていたので、教室作りを上手にすることも大切だと感じた。

また、教師の質問に対して、児童の多くが挙手していることにも驚いた。私の小学校時代は５、６年生になったころ、手を挙げないほうがかっこいいという風潮があり、手を挙げるのは毎回決まった人だけであった。それが長良小の６年生のクラスを見させていただいたときには、ほぼ全員の手があがっていた。「すごい！」改めて長良小学校の先生方の力を感じた。また、自分の意見を必死に伝えようとする「どろくさい」児童の姿もとても印象的だった。その児童は、一度指されて意見を発表したものの、周りの児童にうまく理解してもらうことができず、理解してもらえるまで何度も何度も意見を言っていた。そのような「どろくささ」も身につけておくと、勉強以外にも粘り強く物事に挑戦できる力をつけることができるのだろうなと感じた。

「みどり会」を読んで、長良小学校の先生方の教育にかける思いにとても感動した。家に帰ることを忘れるほど授業の準備をしたり、児童の立場になって物事を考えたり、教師同士が支え合ったりするなど、教師を目指している私から見てどれも尊敬できることであり、自分自身もそうなりたいと強く思った。ここに書かれていたことは、書かれているだけでなく、しっかりと実践されていることも授業を見ただけで強く伝わってきた。休み時間という少しの時間でも、児童と一緒に校庭に出て思い切り遊ぶ多くの先生方の姿や、先生方同士の仲が良いということ、自然が豊かであることなど素晴らしい環境がある長良小学校をとても羨ましく思う。今回、長良小学校で学んだことを自分が教師になってからしっかりと生かしていけるように努力していきたい。

長良小学校に行って

B3E12014　金子紗也佳

岐阜市立長良小学校に行って、第一に思ったことは、「こんな小学校があるのか、こんな子どもがいるのか」という驚きでした。理想の子どもと現実の子どもが違うことを現場に行くなかで少しずつ実感し、やはり理想は理想でしかないと感じていた私にとって、理想がほとんどそのまま現実となっている「長良っ子」の存在はにわかに信じがたいものでした。その私の驚きについて、特に驚いたことを二つ述べたいと思います。

一つ目は、話を聞く態度です。具体的には、日直が前で号令をかけると全員が日直の方を見てすぐさま指示に従うこと、発表する子の方に体を向けて聞くこと、発表が終わった後に「質問があります！」「付け足しがあります。」といった発言ができることです。どれも当たり前のように思えて、なかなか徹底することが難しいと思います。ですが、長良小では１年から６年までどこのクラスに行っても、全員がそれを当たり前のようにこなしており、クラス全員が発表する子の方に体を向けようと一斉に椅子を動かす姿、そして音はまさに圧巻でした。

二つ目は、教師の役割です。見させていただいた３年生の社会科の授業で、主役はまさに子どもでした。子どもが自分の予想を黒板を使って説明し、言っていることの意味がわからないと言われれば、自分なりにもっと皆に分かりやすいように伝え、それに対して子どもがまた質問するという、ほとんどが子どもの説明、質問で埋め尽くされた授業でした。その中で先生は何をしていたのかというと、子どもの言ったことを確認したり、子どもに対してさらなる疑問を投げかけたりと、流れを作り、場が荒れない程度の介入をしているだけでした。社会科は先生の説明そして暗記という授業しか受けたことのない私にとって、先生がほとんど説明をすることのない授業というのはとても新鮮でした。

長良小学校でたくさんの授業を見せていただきましたが、平日の３、４時間目の間という短い時間のみだったので先生方に詳しいお話を伺うことができませんでした。ですが、長良小学校から先生方が長良っ子について書いた「みどりの会」の冊子をいただいたので、そこからみえた長良小の先生方について少し述べたいと思います。

この冊子の第１部で長良小学校が願う子供像について、長良小設立の昭和９年度から現在のものまでが書かれているのですが、どの時代のものであっても、心豊かに生きる「たくましさ」という一言に集約されます。この「たくましさ」こそが長良っ子特有のドロくささであり、いい意味でのしつこさとして表れていると感じました。この冊子の中で、ある先生がたくましさについて以下のように述べています。「たくましさとは自らの人生を前向きに切り開いていく力であり、授業はその力を培う。課題を把握し、その課題解決に向かって全力で取り組んでいく授業は、まさに人生の縮図である。」教師は授業を通して子どもに人生の生き方を教えているといいますが、こんな壮大なことは一人の教師だけでは成せないと思います。だからこそ長良小のような学校全体での教育が求められるし、全体でやるからこそ全員の先生が全力で子どもと向き合うのだと思いました。

長良小学校を訪問して

B3E12018 黒羽　雄大

長良小学校を訪問させていただき、わたしが感じたこと・学んだことを児童と先生方、それぞれについて述べたいと思う。

１　子どもたちといる長良小の先生方

まず先生方についてである。教務主任の後藤先生が話して下さったことの中で強く印象に残っている言葉がある。それは、教師も児童たちと一緒に成長していくという言葉である。

最近、教師に求められることが多くなり、子どもたちと関わる時間が減ってしまっているという話を聞いたことがある。しかし、長良小の先生方は子どもと関わる時間や機会をとても大切にしていると後藤先生はおっしゃっていた。実際に休み時間の校庭の様子を見ていても、たくさんの児童に交じって遊ぶ先生方がも多く見られた。私が小学生の頃、あそこまで先生たちが一緒に遊んでいるということはあまり無かったので、本当に驚いた。 私も教員になった時には、子どもたちと関わる時間を多く作り、子どもたちと一緒に成長するということを忘れずにいたいと思った。

２　発言する「長良っ子」

次に長良小の児童についてである。長良小の児童を見て驚いたのは、発言への積極さである。普通のクラスなら、恥ずかしかったり、自信が持て無かったりと消極的になってしまう子も多くいるだろう。しかし長良小の児童は、全員が自分を指してくれと言わんばかりに必死に手を上げていた。その背景には、子どもたちが発言しやすい様な環境作りがされていたり、子どもたち同士でも、人の発言を冷やかしたりせずにきちんと聞くということがどの学年でも実現されているのだと思った。

３　「みどり会」を読んで

ここからは、長良小でいただいた「みどり会」という冊子を読んで思ったことについて述べる。この冊子は三部構成で、長良小で行われている教育について書かれている。それは、「たくましさを培う長良小の教育」、「常に先を見据え、今日的な課題解決に立ち向かう長良小の教育」、「地域と歩む長良小の教育」である。

私がその中で特に強く印象に残っているのが、たくましい児童を育てる授業について書かれた次の文である。

「自分の生き方を強くすることに繋がる学習は、その過程に置いて乗り越える苦しさは伴うにしても、本来楽しいものである。」

ただ、楽しいものと言っても子どもたちが課題を乗り越えたり、新たなことを学んだりすることが楽しいと思える様な授業作りを心掛けなければならないと感じた。

岐阜旅行感想

B3E12019 児玉　裕哉

１．長良小学校の感想

長良小学校の見学は、驚きの連続だった。驚いた点を三つ上げる。

一つ目は、授業になると全員がピンっと手を挙げることである。その様子を見て本当に驚いた。私の小学校時代を振り返ってみると、児童全員がそろって手を挙げていたというのは記憶にない。まさに「児童が主体的に学ぶ」という言葉を具現化しているようなクラスだった。

二つ目に驚かされたのは、休み時間になると授業の雰囲気とは真逆の雰囲気になるということだ。児童がほぼ全員が外に出て、元気に遊んでいた。その様子を見て、思わず「たくましい」と言ってしまうくらい凄まじい児童たちだった。また、休み時間になると児童だけでなく先生方も一緒になって、たくましく遊んでいるというのが印象的だった。私が現在通っているボランティア先の小学校と比べても、休み時間に児童と遊ぶ先生方が圧倒的に多かった。このように、普段から児童と関わる場面を増やすからこそ、児童との信頼関係が生まれてくるのだと感じた。

三つ目に驚かされたのは、ほめ言葉の多さだった。長良小学校のクラスを五つほど見させていただいた。共通点があった。それは、「掲示物でほめる」ということだ。どのクラスにも、必ずほめ言葉の書いてある掲示物が貼ってあった。ただほめるだけでなく「花丸」や「具体的な長いコメント」といった、ほめられていることが視覚的に実感できるようなかたちになっているのだ。とても勉強になるものだった。

以上の三つの驚きをまとめると、長良小学校は、「日常」を大切にしているのだと私は考えた。普段から、児童と関わり、信頼関係を形成することや、ほめ言葉を多くかけること、日常の授業、そのような積み重ねがあるからこそ、レベルの高い児童を育てることができるのだと思う。

長良小学校の児童のようなレベルの高い児童を育てるためにも、私が教師になったときには「日常」を大切にしていきたい。

２．「みどり会」を読んで

みどり会を読んで強く感じたことは、冊子に書かれている先生方は、教材研究を熱心になさる先生、教科部会や全研などの試練を乗り越えられた先生など、子どもに教える前に、まずは自分自身が必死に努力されているということだ。それ読んで、長良小学校の教育がなぜ素晴らしいのか、わかった。児童をたくましくする前に、教師自身がたくましいのだ。子どもが努力する前に、教師自身が努力しているのだ。そのように感じた。

長良小学校の先生方のような教育をするためにも、まずは自分自身がたくましくなり、児童が努力する前に、自分が努力する。そのようなことを教師になったとき、心がけていきたいと思った。

長良小学校についての感想

B3E12021　佐藤孝幸

平成 27 年 5 月 22 日に岐阜市にある長良小学校に行ってきました。長良小学校は多くの自然に囲まれた学校でした。私の通っていた小学校も周りが自然に囲まれた学校だったのですごく親近感が湧きました。

しかし、私の学校と異なる点がいくつもあり、それが顕著に表れたのは授業でした。私の学校は先生が児童を指名したほうが多いくらいだったのですが、長良小学校の児童はほぼ全員と言っても良いほど全員が手を挙げるのです。私の通っていた小学校が悪かったとは言いたく無いのですが、その差があまりに大きかったのでとても悔しかったです。

それと同時に、なぜここ長良小学校の児童はこんなにも積極的なのかがとても気になりました。授業を見させて頂いた後で担当の先生のお話を聞いた時に、長良小学校の児童がなぜこんなにも積極的なのか少しわかった気がしました。最初は子どもが元気なのは土地柄なのかな、と思っていたのですが、そうではなく先生方お一人お一人が児童のことを考えて行動し、学校全体の教育の質を上げているのだと感じました。その結果が教室に「間違えても恥ずかしくない」という雰囲気を作っているのだと思いました。長良小学校の校長先生をはじめ教員全員が､長良小学校をそういった雰囲気にしているのだと感じました。今回は観光を兼ねてだったのですが、機会があったらまた長良小学校に足を運んでみたいです。

また、長良小学校が古くから伝統がある学校であるということを 80 周年記念誌である『みどり会』という冊子から読み取る事が出来ました。長良小学校は近年、教育に力を入れてきた学校ではなく、以前から常に教育に熱心に取り組んでこられたということがわかります。

冊子を読んで私がすごく気になった話があります。玉木隆さんの「よりよく生きようとするかけがえのない人間」という話です。これは長良小学校の子どもの本質を捉えたものです。話は修学旅行に行った時、あるグループが時間になっても集合場所に来なかったというところから始まります。遅れて戻ってきた子供たちは自分たちの非を、自分たちの意思で立ち上がり伝えたのです。

授業を見させて頂いた時にも感じたのですが、長良小学校の子どもたちはみんな堂々としていました｡それはみんなの前で意見を言っている時にはっきり感じました｡『みどり会』を読む前は子どもたち自身の育ってきた環境で培ったものだと思っていましたが、学校全体、地域全体でこの理念を実践しようとしていたのです。この理念は教師一人一人から子どもたちに伝わり、長良小学校の子どもたちが各々ありのままの自分を表現し、仲間のありのままの姿を受け止めるといった長良小学校の子どもたちの特徴にもなっているのです。その特徴が、私が授業を見て感じたものであると思います。

今回の長良小学校の訪問は、私にとって長良小学校の子どもを通して教育というものを考えさせてくれる実りのあるものとなりました。

長良小学校を訪問して

B3E12030　田島由香利

私が教室に入ってまず驚いたことは、上履きの踵の踏み潰しが誰にもみられないことであった。よく先生の指導が行きわたっているな、と思ったが、後に他の学級の授業を見学に行った時にどの学級でも同じであることがわかった。担任教師による指導だけではなく、学校全体でよく取り組まれているということがうかがえた。このようなことをうかがえる点は他にも二つあった。

一点目は筆箱を机の上に出さないことである。必要なものだけ机の上に揃えて置くようにしていた。手悪さをさせないためにそうしていると考えたが、確かに筆箱の形やキーホルダーなどに制限をかけるよりはわかりやすく効果的ではないかと思った。二点目は掲示物についてである。児童が頑張ったことについて小さい長方形の紙に書かれている掲示物がどの学級にもみられた。短い言葉ではあるが児童のよい所がみんなの目に留まるようになっていて、自分も頑張ろうと思わせたり、この子のここがすごいと互いを認め合わせたりすることができてよいと思った。

掲示物についてであるが、授業をみせていただいた三年一組の教室で注目したものが二つある。一つ目は、教室全体で授業内容が表わされていることである。児童が調べた結果を表わした地図など、教室を見渡せば今までの学習内容が振り返れるようになっていた。研究授業が後に行われていることを想定した掲示物であると考えられるため、どの授業でも同じように行うことはもちろん難しいが、このような掲示物による学習の振り返りはよいと思った。二つ目は、時計の真下に置いてあった本である。本の題名は『教室は間違う所だ』。この本がどのように取り上げられたかはわからないが、学級のスローガンのようなものの一つであると考えられる。学級目標が黒板のすぐ上に貼ってあるというのは見たことがあるが、本が置いてあるのは珍しいのではないかと思った。言葉のみを掲げるのではなく本の内容を想起させることで、児童に自分の行動を意識させることができるのではないかと思う。

長良小学校からいただいたみどり会の資料には、主幹の先生が何度もおっしゃっていた「たくましさ」「どろくささ」という言葉が出てきた。また、児童に焦点を当てて書かれた先生方の文書には、「主体的な」という言葉もよく登場してきたように思う。八十年という長い歴史をもち、さらに、資料に文章を寄せられている先生方の勤務時期が必ずしも一致しているというわけでもない。にもかかわらず、同じように長良小学校の特性を語られるのは、本当にすごいことだと思う。

先生方の中には教師の視点に立った内容を書かれている方もいる。その中からは先生方がどれほど奮闘し、悩み苦しんでいたのか、その鱗片をうかがい知ることができる。そして、私たちがたった一度の訪問でまったく気が付かなかったほどの努力が、現在も行われているのだと感じられた。

長良小学校について

B3E12031　田原陽平

長良小学校を訪問して驚いたことが二つあります。

一つ目は、長良小学校の児童は挨拶がしっかりできることです。長良小学校の門をくぐり、昇降口へと向かう途中に突然「おはようございます」と大きな声が聞こえてきました。声の方を見ると、体育の授業をしている児童たちからの挨拶でした。休み時間に、廊下を歩いていても、すれ違う児童たちが元気にそして笑顔で挨拶してくれる姿を多く見ました。私は、「ちば！教職たまごプロジェクト」というものに参加し、週１日小学校で研修しています。登校日の朝は、正門の前に立って登校する児童に挨拶をしています。挨拶を返してくれるのは全体の 7～8 割ぐらいですが、しっかりと私の方を見て笑顔で挨拶してくれる児童は半分もいないように思います。だからこそ、どの子も笑顔で挨拶してくれる長良小学校の子どもたちに驚きました。

二つ目は、児童の授業に対する姿勢です。私は、長良小学校では二つの社会科の授業を見学しました。そのどちらの授業においても、児童が積極的に手を挙げて発表していました。特に、ほぼ全員が手を挙げていることには衝撃を受けました。現在通っている小学校では、どんなに多くても 8 割ぐらいで、ほとんどのクラスは半分ぐらいでした。また、児童は、発表の中で、何とかして相手に自分の考えを伝えたいという気持ちが前面に出ていました。発表中に他の児童から否定的な意見が出されたとしても、めげずに自分の意見を最後まで伝えようする姿勢に感動しました。そして、聞く側も発表者の言いたいことを理解しようとしているのが目に見えてわかりました。後ろの席の子が発表するときに、全員が即座に体を後ろに向けて聞く姿勢を整えていました。このような児童の姿勢に驚きました。

また、みどり会の 80 周年記念誌を読ませていただき、大変勉強になりました。「『たくましく』とは独立の精神を表し、どんな困難に直面しても、屈することのない自主独立の精神である。」「長良らしさとは何か。それは、どろくささ、たくましさだ」などといった願う子供像の歴史があり、そのうえで現在の「郷土を愛し人間性豊かに生き抜くたくましい子」という教育目標が掲げられていることを知りました。私が各教科の授業を考えるとき、いかにして児童に興味や関心を持って授業に取り組んでもらい知識を獲得してもらうか、どうすれば円滑な授業を進められるのか、という点について考えながら授業の構想を考えます。しかし、このみどり会の記念誌を読んで、私にはそもそもの根底として、どのような子どもに育てたいのか、という発想がないことに気づかされました。

「教育っていうのは時間のかかるものなんだよ」とある小学校の先生から言われたことがあります。挨拶ができない児童も根気よく支援していけばできるようになる、ただしそれには時間も必要だということです。長良小学校の児童は既に全員が元気な挨拶ができて、授業中に自分の考えを発表しようと手を挙げることができていました。この状態になるまでに先生方はどれだけの努力をなさったのでしょうか。学校全体の、伝統の成果なのでしょうか。記念誌を読んで思いました。今回長良小学校で勉強させていただきありがとうございました。今後の学びに生かしていきたいと思います。

長良小学校について

B3E12041 渡部琴絵

１　驚かされた子どもたちの姿

私が、長良小学校に行って学んだことは、「子どもは、学校全体で育てる」ということです。これについて、印象的だった児童の様子や学校の様子を踏まえて述べたいと思います。

まず、長良小学校に行き、一番驚いたことは、児童の様子です。児童がよく挨拶をしており、授業中にはほとんどの児童が手を挙げ、自分の考えを発表するときも堂々としていました。さらに、児童の「聞く」姿勢にも驚かされました。児童一人一人が、先生やクラスの友だちの発言に耳を傾け、発言者に体を向けて、「うん、うん。」「違うよ。」などと、反応していて印象的でした。このような児童の姿勢は、どこかのクラスだけが出来ているというわけではありませんでした。３年生の授業見学のあとに、６年生の教室に行くと、子どもたちの発言している様子、「聞く」姿勢がまったく一緒だったのです。３年生の教室を６年生のところにそっくりそのまま持ってきたようで、非常に驚きました。

また、学校の様子も印象的でした。歴史のある校舎でしたが、どこも掃除が行き届いていて、トイレのスリッパがきちんと整えられているなど非常にきれいでした。さらに、どのクラスも掲示物が充実していたことも印象的でした。今まで、掲示物というと、子どもの作品というイメージが強かったのですが、授業で使う教材なども貼られており、非常に勉強になりました。学校全体で、こうした細かい配慮がされているのだと感じました。

このような児童の様子や、学校の様子は、先生方全員によってなされているものであると感じました。それは、学校全体でどんな子どもを育てるのかという目標をきちんと共有しており、その目標を共有した上で、学校全体で「聞く」姿勢などの指導方針を統一しているからできることなのではないかと思いました。こうした先生方の学校全体での努力によって、素晴らしい「長良っ子」が育つのだと感じました。

２　『みどり会八十周年記念誌』を読んで

長良小学校で勤務された方々の文章を読んで感じたことを述べたいと思います。まず、時代が違っても、先生方が学校全体でたくましい子どもを育てるという目標を掲げていらっしゃったということがわかり、長良小学校の伝統、歴史を感じました。見学させていただいたときに印象的だったたくましい子どもたちの姿そのものが、歴史であり、伝統であるのではないかと思い、素晴らしい歴史を見させていただいたと感じました。

また、先生自身が「長良小学校で多くのことを学んだ」、「ここでの経験が自分の原点になった」と書いていらっしゃるのも印象的で、先生方も学校で、子どもたちとともに、子どもたちから学んでいるのだということを感じました。さらに、初めに挙げられていた事例から、子どもたちは、長良小学校で一生に残る大切なことを学んでおり、小学校での教育が子どもの基礎をつくるということを学びました。

このことから、教師という仕事の責任の重さも改めて学びました。